

「学力」向上のための教科書の役割



三浦登志一
山形大学大学院教授
元国立教育政策研究所学力調査官

山形県生まれ。公立中学校教諭を経て、山形県教育庁で指導主事、国立教育政策研究所教育課程研究センターで学力調査官を務める。文部科学省「評価規準、評価方法等の工夫改善に関する調査研究」協力者。

国語科における「学力」には二つの側面があります。一つは、考えたり感じたり想像したりする力などの理解する力と、それを音声や文字にして表す力からなる側面です。もう一つは、国語についてのいろいろな知識など、私たちが物事を考えたり想像したりするうえで、の土台としての側面です。季節の味わいや言葉の美しさを感じるなど、物事の適否・善悪・美醜を判断する際の価値観や感性もこれに含まれます。

これらを総合して、自分でしっかりと考えることのできる生徒を育てることが国語科の役割であり、教科書もそれを踏まえて編集されています。「学力」を向上させるためには、何か特別なことをする必要はなく、生徒の実態に応じて、教科書を有効に活用しながら指導することが大切です。本稿では、学力を考えると、よくいただく質問に答える形でまとめてみました。

1

国語科における「思考力」「判断力」とは、具体的にどのような力なのでしょう？

A 国語科で使われる言葉は、その意味が曖昧なまま使われ、結果的に評価や指導に生かされていない場合があります。しっかりと把握しておくことが大切です。

①思考力とは

誰かからの話を聞いて引き付けられる、あるいは、文章を読んで感動することがあります。「思考力」は、話を聞いたり本や文章などを読んだりしたときに、感じ、想像し、考えるのに必要な能力です。文学では作品の世界をイメージしたり、説明文では筆者の主張について考えてみたりするよう、実際に発揮されます。話や文章の要旨を的確に把握し理解することから、分析的に

読んだり、批判的に読んだりすることまでを含む、幅の広さがあります。

②判断力とは

「判断力」は、思考していることの適否・美醜・善悪などについて判断を下す能力です。文学作品を読んで自分が感じたことについて、どのような言葉を用いるのが適切なのかを考えて選択する側面、判断する能力が発揮されます。人物の心情について考えるような場面では、感じるごとくつかあったり、考え方が複数出たりします。その中から、私たちはいずれかを選ぶことになり。

根拠となるものを分析的に検討して判断し、考えを組み立てていく。話をする場面でも、自分の話が相手にどのように受け止められているのかを感じ取りながら、時には具体的な例を加えるなどの手立てを講じる。これも判断が伴った行為です。

2

「言語活動の充実」ということがいわれますが、「言語活動」とは、授業の最後にパンフレットを作ったり、話し合いをしたりするような活動のことなのでしょうか？

A 国語科の授業には、必ず言語活動が含まれています。先生の話や聞き取り、授業の振り返りを書いたりすること、広い意味での言語活動です。しかし、学習指導要領に示された「言語活動」は、もっと限定した意味で使われています。單元の中で、国語の能力を身につけるために生徒が言葉を用いて取り組む「ひとまとまり」の活動が「言語活動」なのです。「言語活動」には最後に作品を作るなど、表現力が重視されがちです。文部科学省が以前に作成した「読解力向上プログラム」では「読解力」を向上させるために、①テキストを理解・評価しながら「読む力」を高める取組の充実、②テキストに基づいて自分の考えを「書く力」を高める取組の充実、③様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会の充実を重点目標としています。

この中の目標①は、テキストの解釈や理

3

「全国学力・学習状況調査」はなぜ始まったのですか？

A 全国学力・学習状況調査は、国の教育水準が一定以上に確保されているかどうかを把握すること、教育委員会や学校に指導の改善を図る機会を提供することなどを目的として、平成十九年度から実施されています。

全国学力・学習状況調査が始まったのは、学習指導要領の改訂に向けた動きがある一方で、PISA2003の結果から、日本の子どもたちの読解力が低下していることが指摘された時期でした。基礎・基本となる知識や技能を身につけるだけでなく、そ

4

「全国学力・学習状況調査」はどのような内容で構成されているのでしょうか？

A 調査問題は、主として「知識」に関する「国語A」と、主として「活用」に関する「国語B」の二種類です。国語Aでは、描写や要約、説明などの基礎的な言語活動に関すること、表現したり理解したりするための基礎的な知識技能、言語文化に親しむ内容に関することなどが出題されています。国語Bでは、日常生活や社会生活で必要とされる読書や鑑賞など、言語の活動の活用に関すること、筆者の主張の内容や表現方法などを評価することなどが出題されています。

この調査は、学校での授業場面を意識しており、調査問題は、日々の授業においても使うことができるように作成されています。国立教育政策研究所からは、「授業アイデア例」も毎年出されています。こうしたものを利用しながら授業を作っていくことが大切です。

5 「全国学力・学習状況調査」から、どのような課題が見えてきたのですか？

A 国立教育政策研究所では、平成二十四年に『全国学力・学習状況調査』の四年間の調査結果から今後の取組が期待される内容のまとめ』を作成し、各領域等でのような点に課題があるのかを整理しています。

「話すこと・聞くこと」では、「資料の提示の仕方を工夫し、その方法を説明すること」が課題とされています。

「書くこと」では、「文章や資料から必要な情報を取り出し、伝えたい事柄や根拠を明確にして自分の考えを書くこと」に課題があるとなっています。文章を読んで感想や意見を書く際に、「すごいと思った」や「よかった」にとどまるような書き方になっているなど、自分の感想を具体的に書くことができていないことが指摘されています。

「読むこと」では、「目的をもち、表現の仕方や文章の特徴に注意して読むこと」が課題として挙げられています。新聞のトップ記事とコラムとを比較して書き方の特徴を考える問題では、正答率が五〇％にとどまっています。夏目漱石の「吾輩は猫である

」の一部を読んで、たとえている内容を捉えて書く設問では、本文の一部を引用しただけで説明が不足しているものへの反応率が四四・八％などの結果が出ています。文章の書き手の目的と、それに応じた表現のしかたについて考えさせる必要があります。

6 見えてきた課題に対応するために、教科書をどう使っていけばいいでしょうか？

A 教材や「学習の手引き」を活用しながら、課題とされている力を重点的に指導すること、教科書全体を見渡しなが、年間の指導のバランスを考えていくことの二つが考えられます。

①教材や「学習の手引き」を活用した授業の工夫

全国学力・学習状況調査で見られた課題にどのように対応しているか、教材を具体的に挙げ、その学習の手引き等をもとに考えてみましょう。

「資料の提示の仕方を工夫し、その方法を説明すること」(話すこと・聞くこと)

「資料や機器を効果的に活用すること」は、二年生での指導事項です。教材「印象

に残る説明をしよう」では、実際に発表用の資料を作成し、その資料を用いながらプレゼンテーションを行います。自分の体験を通して、資料の役割や効果について理解させることが大切です。

読むことの教材である「シカの『落ち穂拾い』(一年)には、図や表が多用されています。この教材では、図や表などの資料を用いることの効果について学習したり、図表を添えた日記などの文章を書いたりします。そのことで、図や表を用いることの効果について理解を深めていきます。図や表についての理解が、二年生の話すこと・聞くことの学習につながるようになります。

「文章や資料から必要な情報を取り出し、伝えたい事柄や根拠を明確にして自分の考えを書くこと」(書くこと)

各学年での指導が積み重なるように配慮することが大切です。

「調べたことを報告しよう」(一年)では、集めた情報を観点に沿って整理する学習を行います。集めた情報の中で、必要なものと必要でないものを判断できるようにすることがポイントになります。

「説明のしかたを工夫しよう」(二年)では、取り上げる事実や事柄が効果的に伝わ

るよう、説明のしかたを工夫させます。順序立てる、比較するなどの工夫を取り入れることで、伝えようとしていることがより明確なわかりやすいものになります。

また、読むことの学習と関連づけて根拠を明確にすることができるようになる学習も考えられます。「モアイは語る」(二年)の手引きには、「事実を示して意見を書く」というコーナーがあります。根拠となる事実を示しながらまとめた文章を書くよつな機会も、意図的に設定することが望ましいでしょう。

「伝えたい事柄や根拠が明確かどうか」について、自己評価する眼を養っていくことも大事な指導です。「文章の形態を選んで書く」(二年)では、推敲に焦点を当てて、修学旅行記で何を伝えようとしているのか、伝えたいことと内容とが合っているのかを検討させるようにしたいですね。このよつな指導の積み重ねによつて、「必要な情報の取り出し」や「根拠を明確にして」考えを書く力が着実に身につくことになりま

「目的をもち、表現の仕方や文章の特徴に注意して読むこと」(読むこと)

文章を漫然と読んでいただけでは、国語力は向上しません。言語活動を設定するこ

とによつて、本や文章を読む目的が生徒に共有されるようになるのです。

二年生の教材に、「字のない葉書」があります。【学習の窓】では、二つの思い出を「書き方に着目して」比べています。示されている描写のしかたの違いが、具体的にはどのような叙述と対応するのかを考えさせることによつて、表現のしかたや文章の特徴を、具体的な叙述に即して理解することができま

読むことの学習では、内容をどのように理解するかに重点が置かれがちです。文章がどのように書かれているのかの形式に着目して、その適否や美醜について考え、判断する機会を意図的に設けたいですね。例えば、一年生の「大人になれなかった弟たち」……」で、繰り返しの表現に注目してその効果を考えさせ、二年生の「走れメロス」では登場人物の描かれ方などに注目し、「君は『最後の晚餐』を知っているか」では、表現のしかたや工夫に着目しながら評論を読むよつにするなど、学習の手引きに示されていることを結び付ける指導の工夫も考えられます。本や文章に具体的に表れている特徴に目を向けさせることが大切です。

②領域や内容のバランスを取った授業を

読んで考えたり、考えて書いたりする力は、相互に関連し合いながら向上します。したがって、例えば「文章や資料から必要な情報を取り出し、伝えたい事柄や根拠を明確にして自分の考えを書くこと」に課題が見られたからといって、すべての単元・教材で、根拠を明確にして自分の考えを書くことだけを指導するのは望ましくありません。「読むこと」での力の向上が、根拠を整理したり、伝えたい事柄を明らかにしたりする「書くこと」の力の向上にもつながります。一年間の学習で、三領域一事項の指導事項の全体が学習されるように配慮することが大切なのです。教科書には【学習の見通しをもとに】(各学年のp10)として、教材と身につける力がマトリックスで示されています。このマトリックスを利用して、年間の指導のバランスを取っていき

教科書は、知識・技能の習得に重点を置いて学習した後で、そこで学習したことを活用して言語活動に取り組めるよつに構成されています。こうした特徴を生かして、生徒の言語の能力を螺旋的に向上させるよつにしたいものです。